チーフパーサーはジョギングがお好き

荒井 桂

MY HEARTFUL FLIGHT DIARY

チーフパーサーは
ジョギ

江苏工业学院图书馆
藏书章

Katsura Arai
荒井 桂

リクルート出版

定価1,000円
チーフパーサーはジョギングがお好き（本体971円・税29円）

1990年7月20日　初版第1刷発行

著　者　荒井　桂
発行者　森村　稔
発行所　株式会社リクルート出版
東京都港区浜松町1－18－16　住友浜松町ビル〒105
電話03－5472－2454(代表)
印刷所
製本所　株式会社廣済堂

©1990 Katsura Arai, Printed in Japan
ISBN4－88991－189－8　C0095

編集担当＝岡本達也、萩埜恵子
編集協力＝田中みはる
編集協力＝大迫桂子
乱丁本・落丁本はお取替え致します。

◉目　次

PART 1　スチュワーデス一年生

スチュワーデスになりたい！　7
父のツルの一声て　12
母の祈りの漂白バック　16
東京ってコワいところ　19
『アテンションプリーズ』とは大ちがい　23
あこがれの国際線配属　27
はらはらドキドキの初フライト　31
はじめてのカルチャーショック　35
つらかった〝空酔い〟　37

海外耳寄り情報
見どころ編　●ストーンヘンジでUFOを見た　8　●天使の歌声が流れるウィーンの朝　10　●こぶし大のエメラルドで目の保養　12　●シドニーの有閑マダムたち　14　●神のみめぐみのシャルトル・ブルー　16
●ライン下りは列車で　18　●ロマンチックタウン、ブルージュ　20　●邸宅鑑賞都市エバンストン　22
●デニッシュをかじりながら　24　●アールヌーボーとフォアグラ　26　●国境の町、マーストリヒト　28
●AS　TIME　GOES　BY……ボギーはいずこ　30　●「王さまのように遊ぶ」ホテル　32　●アンカレッジは季節の魔術師　34　●スターライト・ハネムーン　36

PART 2 新米スチュワーデス奮闘中

挨拶は〝紀子さんスマイル〟 43
ファーストクラス乗務と茶道 47
ステーキ二枚を、ペロリ 51
金魚のふんの効用 55
初心忘るべからず 63
ズッコケ〝熱中教官〟 67
もっと高く跳ぶんだ 75

海外耳寄り情報

食べ物編 ●究極のザッハトルテ 44 ●雪越しのビールは飲まないドイツっ子 46 ●ローマっ子だってねえ、プンタレッレ食いねえ 48 ●ハーゲンダッツのお得な食べ方 50 ●シンガポールでカレーとランデブー 52 ●この味ヘンダワネ? 54 ●タイシャブは礼宮様御用達 56 ●うどんにビールがマンハッタン流 58 ●アトランタで世界のビール飲み比べ 60 ●神業バーテンダー 62 ●ホットなチキンで乾杯! 64 ●アンカレッジの雪どけ水 66

PART 3 機内でお会いするお客さま

ハネムーンカップル今昔 85
適齢期とケーキサービス 86
贈り物はキッスでどうぞ 90

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

乗務員の一ドルカンパ 92
レモン湯とパイナップル 94
〝生意気〟はご法度 98
素顔のVIP 102
寛斎さんに教わったファッション感覚 105
余計なことかもしれませんが……108
赤ちゃんとのおつきあい 113
海外耳寄り情報 買い物編 ●ブランド品を買うコツ 86 ●ウィーンの〝のみの市〟 88 ●ハワイみやげにパイナップル・ワイン 90 ●香港最新的市場 92 ●スタンレーマーケットは英語で値切る 94 ●10倍ふっかけるマラケシュの商人 96 ●イタリア買い物マップ 98 ●買い物するならロスよりシスコ 100 ●JALおみやげサービスならシアトルのステーキ 102

PART 4 東西客室乗務員事情

サザンホス・ビタリティ 121
シニアママフライト〝ハワイ50〟 126
ふところの深いデルタのサービス 128
おしゃれでキュートなジョージアピーチたち 132
ところ変われば……
いずこも同じ玉の輿願望 135
海外耳寄り情報 ジョギング編 ●夢のジョギングコース、アルスター湖畔 122 ●ハイドパークの美男ウォッチング 124 ●セントラルパークを走るなら 126 ●サンフランシスコ坂抜きコース 128

PART 5

わが心の都市（まち）

童話の国コペンハーゲン　143
メナムよ、いつまでもゆるやかに　150
サンフランシスコのMr.レディ　156
モスクワ昨日、今日そして明日　160
人の心も自然も美しいニュージーランド　169
ニューヨーク・シンドローム　180

海外耳寄り情報

ご用心編　●コモ湖のナンパ船長　144　●スリの香港VSひったくりのホノルル　146　●「いい子いい子」はタイではタブー　148　●フィジーの散歩は蚊取り線香をさげて　150　●イタリア旅行の必需品　152　●モロッコでノースリーブはご法度　154　●ロングフライトでは食べすぎにご注意　156　●機内はカラカラ　158　●トイレラッシュに時差出勤　160

PART 6

世界を翔び地球を駆ける

スチュワーデスと結婚　189
心を決めた成田てのてきごと　194
新しい可能性を求めて　200
ランディング　207

装幀　あおきひろえ

PART 1

スチュワーデス一年生

スチュワーデスになりたい！

松山ってご存じですか。そう、瀬戸内海に面した、明るく、美しい都市です。松山が私の故郷です。小・中・高校までそこで育ちました。

私は子供のころから、体がとても大きく、おまけに性格も大ざっぱでスポーツが好きという、まさに男まさりの少女でした。

「荒井さんがスチュワーデスになろうと思ったきっかけは何だったんですか？」

日本航空の国際線の乗務をはじめて、ざっと二〇年。この間、いろいろな方から、なんどもきかれた質問です。

「制服にあこがれて」

「海外旅行がしたかったから」

「英語が得意だったから」

まあ、こんな答えが一般的なのでしょうね。ところが私の動機はどれにも該当せず、むしろこれらの答えの反対ですらあったんです。

いま思えば、制服は没個性であまりうれしくありませんでしたし、海外旅行といっても一生に一度あるかないかの大旅行、といった時代でしたから。（ただ、NHKのテレビで〝海外特派員報告〟という番組はよく見ていました。ど

うしたらこの特派員になれるか、と真剣に考えたことはあります。でも、どの特派員も男性ばかりでしたし、結局、今でいえば、宇宙飛行士になりたいと思うに等しいことでした)

さて、英語。これが苦手科目だったんです。クラブ活動に打ちこんでいて、勉強する時間がなかったなんて理由になりませんよね。

じゃ、どうしてスチュワーデスに?

そのへんから書きはじめてみようと思います。

昭和四三年の秋。日本航空は、昭和四五年に行なわれる大阪万国博を前に、B―747の導入を決定、それにともない大量のスチュワーデスを募集することになりました。

そのため、スチュワーデス募集のキャラバン隊を組織、全国の高校、短大、大学に出向いていって、「あなたもスチュワーデスになりませんか」と勧誘したのでした。

そのキャラバン隊が、四国松山にある私の学校にやって来たのは、高校二年の秋。受験希望者は放課後、理科教室に集まるように言われ、行ってみました。

希望者といっても、私もほかの人も、ほんとうにスチュワーデスになりたいと思って行ったわけではありません。一目、現役のスチュワーデスを見たい、話を聞いてみたい、というやじうま気分からでした。好奇心旺盛なのは私の場

●ストーンヘッジでUFOを見た

ロンドンの西方の小さな町、ソルスベリーから、さらにバスで30分。
原っぱの中に巨大な石を積み上げた遺跡があります。
イギリスの歴史より古いといわれるこのストーンヘッジ、
いったい誰が、いつ、何のために作ったものなのかは、いまだに謎。
実は私、10年前にここでUFOを見ています。
低い木の上を白い2つのあかりが垂直に上がったり下がったり。
ストーンヘッジはUFOのために作られたという説があり、
実際このあたりではたびたびUFOが目撃されている、
という話をきいたのは、それからずっとあとのことでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

合生まれつきでした。当時は、四国あたりでは、東京へ行くのに飛行機に乗るというだけで、自慢できる時代でした。現役スチュワーデスには、映画スターや歌手に対してと同じようなあこがれがありました。

窓側の席に、薄いブルーのツーピースに、同色の丸い帽子をかぶった二人のスチュワーデスが座っていました。その隣に、採用係の課長さん、それに、驚いたことに、この年採用の決まったわが校の三年生の先輩と、就職係の先生も座っていました。

わが校の先輩が、来年からスチュワーデスになる……。それを知ったとき、はじめて、スチュワーデスという職業がむこうから少し近づいてきたような気がしました。

現役スチュワーデスの話は、美人で英語ペラペラ、かっこよく機内を歩いているだけという、それまでの私のイメージを一掃するものでした。

自己を殺して、いつもにこやかにお客さまへのサービスにあたること、飛行機の中という閉ざされた空間で、病人が出たり事故が起こったりしたときには、すばやい判断と冷静な行動が必要なこと、グループを組んで乗務するため協調性が必要なこと、環境のちがう国々への乗務は、精神的、肉体的にとてもハードなことなどを、わかりやすく話してくれました。

その二人の現役スチュワーデスは、もちろん美しい人でした。しかし、笑いをたやさないまま、その仕事が、見た目以上に厳しく、責任のある、やりがい

のある仕事であると話してくれたのでした。

私は、前に少し書いたように、とても体の大きな子供でした。それだけでなく、性格も大ざっぱで、ふるまいも男まさり。長男を、生まれてすぐに亡くした両親は、小学校に上がるまで、次女の私に男の子の格好をさせていました。かりあげ頭に、半ズボンをはき、白い編みあげの革靴。それがまたよく似合いました。そんな私を見て、誰もが男に生まれれば良かったのにと思ったはずです。

そんな私ですから、女性のやさしさを表に出したスチュワーデスや幼稚園の先生、看護婦さんは、自分には縁のない職業と思い込んでいました。

それが、現役スチュワーデスの話を聞くうちに、まるで、自分にぴったりの仕事のように思えてきたのです。

体は丈夫だし、人のめんどうをみるのは大好き、クラブ活動を通して、先輩、後輩のけじめもよくわかる。英語を含め、筆記試験の勉強さえがんばれば、ひょっとしたら……と思えてきたのでした。

昭和四三年ごろといえば、学園紛争の最中。行きたい大学はどこも学生運動ばかりで、正常な大学活動が行なわれていませんでした。そんなあやふやな大学入試へむけての勉強は、もうひとつ目標が定まらなかったのです。キャラバン隊の話が、私に大きな目標を与えてくれたのは、こんな事情もあったからなのです。

●天使の歌声が流れるウィーンの朝

ウィーン滞在の日が日曜にあたったら、朝の行動はもう決まり。
まず町の中心部にある王宮礼拝堂へ。ミサでウィーン少年合唱団が歌います。
席とりが大変ですが、〝ウィーン通〟は
中に入れない人たちのためにドアの前に設けられたTVの前の場所を確保します。
ここにも大勢つめかけますから、９時15分のスタートより少し早めに行くこと。

しかし、そうは思っても、英語も得意ではなく、とりたてて美人ともいえない私です。

「スチュワーデスになりたい」と口にする勇気はとてもありませんでした。

じつは、私がスチューワデスになったきっかけは、マラソンなんです。毎年行なわれる校内マラソン大会は松山城跡近くを走るかなりキツいコースですが、卓球部に入っていた私は、卓球の練習より、外ばかり走るほど、長距離が好きでした。とくにその年は、三年生の先輩からキャプテンを引きついだばかりで、新キャプテンの面目にかけても今まで以上の好成績をあげたいとレースにのぞみました。厳冬なのにちっとも寒さを感じませんでした。靄で、先がよく見えないまま、夢中で走りました。陸上部のキャプテンを抜いたのをおぼえています。自分が一番でゴールインするとわかったとき、はじめて足がガクガクしてきました。ゴール近くではたくさんの同級生や下級生が声援を送ってくれていましたが、それも、ただワーンと響くばかり。テープを胸の下で切りながらゴールを走り抜けたそのときでした、「スチュワーデスの試験を受けよう」と思ったのは。

マラソンとスチュワーデス、何の関係もなさそうにみえますが、そうではありません。生まれてはじめて一等賞をもらったそのとき、自分がスーパーマンになった気がしたのです。なんでもできそうな気がしたのでした。

父のツルの一声で

「桂チャンは、背が高いから、外国行っても、釣り合いとれていいかもしれんよ」

スチュワーデスの試験を受けようと思うと言ったとき、友人たちは、なんだかへんな理由をつけて、賛成してくれました。

家族の反応はいろいろでした。すでに東京の大学へ行っていた四歳年上の姉は、スチュワーデスになるなら大学へ行ってから受けても遅くはないんじゃないかと、学園紛争の少ない大学への進学をすすめてくれました。

母は、女の子が見知らぬ外国へ行き来する職業なんてと首を傾げました。

そんななかで「自分がしたいことをするのが何より」と賛成してくれたのは父でした。「いらない心配などして、子供の将来の芽をつぶすんじゃない」と母をたしなめ、姉に対しては、「高校卒で、スチュワーデスの試験を受け、だめなら大学へ行き、また試験を受ければよい」と説得してくれたのです。

新しもの好きで旅が大好きだった父は、その数年前に、二度にわたって、中近東やヨーロッパを長期に旅していました。飛行機のトイレに座ったまま着陸したり、日本から持っていったセイコーの時計を、ドイツのカメラと交換してきたり、武勇伝にはこと欠かなかったようです。

●こぶし大のエメラルドで目の保養

もうひとつ、ウィーンの日曜日の楽しみを。

王宮礼拝堂のお次は、すぐ横の王宮博物館（宝物殿）へ。

日曜は入場無料のため混雑するここも

朝、開館直後のこの時間はガラあき。

目玉は、直径 20 センチ以上のアクアマリンやこぶし大のエメラルドなどすばらしい宝石の数々。トルコのトプカピ宮殿のそれにも匹敵すると言われています。

応接間に中近東のカーペットや置き物、アクセサリーを飾ったり、中東戦争以前の、美しいイスラエルやエジプトの街並の8ミリを、夜になると映写していました。私たち家族をそこに呼び、みやげ話や武勇伝を聞かせるのです。私の外国へのあこがれも、自然にかきたてられました。私がスチュワーデスになったのは、八年前に亡くなった父の影響が大きかったと思うのです。

その後スチュワーデスになってから、父の思い出の街へ行くときなどは、あそこの何がおいしい、店のおやじによろしく言ってくれ、などと、自分が行ったのが、つい昨日のことであるかのように私に長々と話をしてくれたものです。

私が外地（父はこう言っていました）から出す絵葉書も、父がいちばん熱心に見ていたようです。

さて、スチュワーデス受験が決まると、私は英会話を習いはじめました。

そのころの松山で、ただひとつだけ見つけることのできた英会話教室は、YMCAの社会人学級でした。集まっている大人も、趣味で習っている人がほとんど。先生も、日本人でした。いま考えれば役に立ったのかどうか。とにかくのんびりしたところでした。他には、学校の勉強を、少し身を入れてやったぐらい。今のようにスチュワーデス受験用の練習問題集があるわけでもなし、何をやったらよいのやら見当がつかないというのが本当のところでした。

ところが、家の中ではもう大変。

「そんなに音をたてて茶碗をおいたら、飛行機中のお客さん、びっくりするじゃ

ろうが」

「使ったものは、元にもどしとかんと、他のスチュワーデスさん、使えんじゃろが」

のんびりした性格の、あまり子供をしかることのなかった母が、受験が決まってからは、立居ふるまいを一つひとつうるさく言うのです。

だいたい、桂のまわりにはこわれやすいものは置くな、白いものは着せない方がよい、と言われていました。私の動作は、早くて要領がいいぶん、荒っぽく、そそっかしいのでした。

「お姉ちゃん、おしとやかにせんといかんよ」

弟や妹までが言うのでした。

まあ、家族ぐるみでスチュワーデス受験気分を盛り上げてくれていたのですね。

そうこうするうちに、あっという間に半年が過ぎました。いよいよ試験です。

第一次試験は、筆記試験で、高松で行なわれました。松山からは予讃本線で三時間かかります。

英語と一般常識があり、どちらも選択方式でした。四歳年上の姉から、たっぷりと、選択方式試験の要領を教わっていました。前半より後半がむずかしいので、あまり前半に時間をかけないこと。迷ったとき、わからないときは、必ず、その日に決めた数字の番号を記入すること。このやり方が正解率が高いと

●シドニーの有閑マダムたち

ダブルベイはシドニーの湘南。金持ちが優雅にショッピングや食事を楽しんでいます。
シドニーの市街地とはまるで別世界、ヨーロッパのような雰囲気を持つ町です。
やたら気取ったレストランでは、
高価な服に身を包み、ものうげに時間をつぶす有閑マダムたちの姿が目につきます。
彼女たちを観察しているだけで退屈しません。
ただしこのレストラン、ラフな服装では入れないのでご注意を。
シドニーからダブルベイへは路線バスも出ています。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com